

外務省での勤務

平成30年12月
外交実務研修員 矢野 亜季
(徳島県から派遣)

1 はじめに

外務省生活を開始した日のことは今でも容易に思い出せます。右も左も分からず漠然とした不安だけが心を占拠していた日です。分からないことが多すぎて時間がとても長く感じられたあの日から早1年8か月が過ぎ、東京での勤務も残すところあと4か月になりました。今回、外務省勤務を振り返る機会をいただいたので、今までの外務省生活を少し思い出してみたいと思います。



【外務省前の桜】

2 北米第一課での業務

(1) 北米第一課での日常

北米第一課は米国とカナダを所管しており、その中でも私は米国政務班と米国法務班を兼務しています。

政務班では、招へい事業を担当したり、米国から日本を訪れる方々の日本でのアポを調整したりしています。時には関係各所との連絡調整は難しく、思うようにできないこともあります。日本に感激した様子を見たり、日本での意見交換や文化体験がいかにもすばらしかったかを聞いたりすると、それまでの苦勞が報われた気がします。

法務班では、日米間の取り決めや出来事について諸々の手続きが円滑に進むようにサポートしています。

(2) 大型行事

日米関係は今までになく強固であると言われていたのですが、私が北米第一課で勤務した1年8か月の間に、大統領の訪日が1回、副大統領の訪日が2回、国務長官の訪日が3回あり、その他にも多くの連邦議員や有識者の方々が訪日するとともに、総理や外務大臣の訪米もありました。

そのような大型行事毎に、行事担当、プレス担当、夫人担当と様々な業務を経験させていただきました。十分に役割を果たせなかったと思うこともありましたが、どれをとってもここでしか経験出来ない貴重なものだったと思います。特にトランプ大統領の訪日は、私にとって初めての超大型イベントであり、全てのことがよく分からない中で無我夢中で取り組んだという意味で、無事に全ての行事が終了したときの達成感と安堵感は一入でした。また、全員で同じ目的を持って一致団結する心強さを改めて感じる事が出来ました。



【晩餐会の風景(外務省ホームページより)】

3 外務本省勤務で感じたこと、印象に残ったこと

世界各国が自国の利益を最大限守るために頑張っていて、互いを尊重しながら協力しあっています。外務省はその最前線で矢面に立つ、非常に責任の重い仕事だと体感しています。大きく報道されることより報道されない小さなことの方が圧倒的に多く、日々世界中で外交官が日本のために努力を積み重ねています。そのような人たちと一緒に仕事をして感じるのは、外務省のみなさんは、本当に自分の仕事が好きなのだということです。同時に、好きでないとこなせない、とてもタフな仕事だとも思います。

また、みなさんオンオフの切り替えがうまく、仕事に真剣に取り組む一方で、仕事を離れると愉快で楽しく、ゆったりモードになる人もいて、オンオフをしっかり区切ることでタフな仕事を乗り切っているのかなと思います。



【日米の国旗】

4 最後に

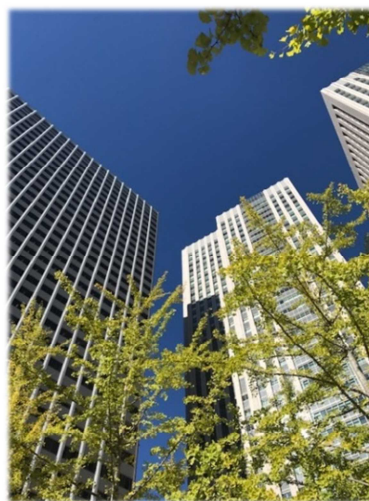
北米第一課に配属され、「外交」を身をもって経験できたことは、何ものにも代えがたい私の財産です。往々にして仕事はつらく苦しいですが、不甲斐なく頼りない私を諦めることなく、親身にに関わり御指導くださる北米第一課の皆様、関係各課の皆様、同じ立場として悩みを共有し相談しあえる関係を築けた外交実務研修員の同期の皆様、また、徳島県で私の出向を喜び応援し支えてくださっている全ての方に感謝申し上げます。今ここにいることを誇りに思い、期待に少しでも添えるよう、自分に出来ることを頑張りたいと思います。

…余談…

外務省周辺は、春には桜がとても美しく、秋にはイチョウが黄金色に紅葉します。季節の移ろいを感じるのも楽しいですし、個人的には、外務省から帰るときに右手に見える東京タワーの景色と、中央庁舎8階の廊下の窓から見るビルの景色がとても好きです。天気の良い日には、高いビルの隙間からきれいな青空が見えて、気分もリフレッシュします！



【毎晩見える東京タワー】



【ビルの隙間から見える青空】



【外務省周りのイチョウ】 (了)